

お わ り に

理事 首席研究員 田中 祀捷



わが国を含む先進国は、栽培有機資源（リサイクル資源）から採掘鉱物資源（非リサイクル資源）への移行により、エネルギー資源の多消費文明を築いてしまった。そのため、資源枯渇と地球温暖化が危惧されるようになった。今後は、エネルギー寡消費で豊かな社会を建設することを目指すべきであろう。

そのためには、種々の高効率エネルギー転換技術や省エネルギー技術を開発すると同時に、革新的技術を開発して、社会をエネルギー消費のGNP弾性値が低い構造に変革していくことが必要である。そのためには、過去に

保持していた「もったいない」感覚や「物を大切にする」意識を復権するような意識改革を行うことも望ましい。

さて、現代の物質文明を単純化すると、先進国は「プレ脱工業化システム文明」にあり、開発途上国は「工業化システム文明」にある。エネルギー寡消費に向かっていくとすれば、この二つの文明の衝突が起こる恐れがある。この衝突を、政治・経済・技術的に、回避し共存共栄の道を探っていかなければならないが、その中でも情報技術やバイオ・遺伝子技術といった技術革新をもって根源的な解決を与えてくれるように行動していかなければならない。

本レビューのテーマである「需要家と電気事業のエネルギーをトータルでとらえる」ことは、情報技術という新しいツールを用いて、供給者と需要者のコミュニケーションを良くし、エネルギー寡消費で豊かな社会を建設することに通じるものである。エネルギーという「米」を、「資源・エネルギーを大切にする」ことを意識しつつ、リサイクル技術も含む革新技術を用いて、どのように料理するかが問われているといえる。本分野の積極的な取組みが期待される。